

8) 化学療法が奏功した膵腫瘍の1例

松村 修志・齋藤 征史	
船越 和博・秋山 修宏	
加藤 俊幸・丹羽 正之	(県立がんセンター)
小越 和栄	新潟病院内科
土屋 嘉昭・筒井 光広	
佐々木 寿英・楠山 明	(同 外科)
根本 啓一・本間 慶一	(同 病理)

症例は29歳，男性。主訴は黒色便。上部消化管内視鏡で十二指腸主乳頭出血を伴う腫瘍を認め、腹部 CT、腹部血管造影等から多発性肝転移を伴った膵頭部癌と診断した。十二指腸空置術を目的に開腹し、組織学的にランゲルハンス氏島腫瘍と確診した。EAP 療法、5-FU+MMC 併用療法、DAV 療法等の化学療法を試みるも、抗腫瘍効果は認められず、ストレプトゾシン 1.0g/週で計 29.0g 投与したところ、腫瘍本体並びに肝転移巣は著明に縮小を認めた。悪性の非機能性ランゲルハンス氏島腫瘍は、進行してから発見されることが多く、化学療法の適応になり易い。ストレプトゾシンが進行した症例にも、有効であったので報告する。

9) 各種消化器癌（食道，胃，大腸，膵）に対する CDDP+5FU 療法の治療成績

太田 宏信・石川 達	
石川 直樹・本間 明	(済生会新潟第二)
尾崎 俊彦	病院消化器科
石崎 悦郎・三浦 宏二	
相場 哲朗・川口 正樹	(同 外科)

各種切除不能消化器癌に対して CDDP+5FU 療法を施行し、その成績を検討した。【対象】膵癌9例，食道癌8例，大腸癌5例，胃癌19例の計41例。【方法】CDDP 100 mg/body を第1日目に、5-FU 750 mg/body を5日目まで連日点滴し4週に1回を1クールとした。【結果】膵臓癌では PR 例は無かったが、3例で5クール以上繰り返し、6カ月以上の延命がみられた。食道癌では PR が1例みられ8例中5例に嚥下障害の改善をみた。大腸癌では PR 例1例，症状の改善を2例認めた。胃癌では PR 3例，その他自覚症状の改善が7例みられた。奏効率は全体で12.2%と低率で副作用の主なもの消化器症状であった。

10) 肝細胞癌治療中に Lipiodol 塞栓療法を行い胆嚢癌合併を疑われた1例

若井 俊文・石塚 大	
塚田 一博・白井 良夫	
内田 克之・小山俊太郎	
青野 高志・飯合 恒夫	(新潟大学第一外科)
畠山 勝義	
市田 隆文・松井 茂	(同 第三内科)
中川 巖	

肝癌に対する Lipiodol 塞栓療法施行し、経過中 CA 19-9 が次第に上昇したため、各種画像診断を行い胆嚢隆起性病変を指摘され胆嚢癌を疑い胆嚢摘出術を施行した症例を経験した。隆起性病変は病理組織学的に黄色肉芽腫と胆汁より形成されていた。

lipiodol 塞栓療法後急性胆嚢炎を併発する症例の報告は多くみられるが、本症例のように限局性壁肥厚を認めた黄色肉芽腫性胆嚢炎を併発した報告はありません。画像診断上経時的なエコーによる観察が最も有用と思われ、胆嚢癌の鑑別診断上、重要な症例と考えられたので報告した。

11) 腹腔鏡下胆嚢摘出術における術中・術後合併症

—開腹胆嚢摘出術との比較—

川合 千尋・川上 一岳	
大谷 哲也・藤田みちよ	(日本歯科大学)
吉田 奎介	新潟歯学部外科

腹腔鏡下胆嚢摘出術 (LC) の術中・術後合併症は開腹胆嚢摘出術 (OC) に比べ高頻度ではないかと考えられている。今回、我々は LC と OC の術中・術後合併症、特に術後胆道系合併症の種類および出現頻度を比較検討した。

LC 152 例中18例 (11.8%) で開腹にコンバートした。その内術中胆道損傷により開腹に移行したものは2例であった。開腹移行症例を除いた LC 133 例 (LC 群) を、OC が施行された 133 例 (OC 群) と比較した。OC 群では術中1例に胆道損傷が認められた。術後 LC 群で胆汁漏が1例、胆管狭窄が1例、遺残結石によると思われる疝痛発作が3例に認められた。OC 群では術後胆道系合併症はなかった。その他の術後合併症として LC では、腹腔内あるいは、腹腔前血腫が3例に認められた。

LC で問題となる術中落下結石防止のためには、手術操作の工夫が必要と考えられた。また LC の合併症予防には十分な胆道精査が必要であり、術中超音波検査も有用と思われる。